

## PC-442

### 放射線科とコーチングとチーム医療

名古屋第二赤十字病院 医療技術部 放射線科<sup>1)</sup>、  
看護部 放射線科外来<sup>2)</sup>

○水野 昌太<sup>1)</sup>、猪岡 由行<sup>1)</sup>、照屋 知里<sup>2)</sup>

【目的】当院において2012年から最高の病院になるための取り組みとしてコーチングがはじまりました。放射線科においてもコーチングを参加している医師、看護師、診療放射線技師のなかでチーム医療に役立っていると思われる活動と課題を報告したい。

【方法】コーチングの一環として看護師により月1回行われる【KYT】危険予知訓練の紹介と成果、コーチングの一環として放射線技師により毎日行われるようになった【モダリティー別に行われている朝のミーティング】の紹介と成果を報告する。

【結論】放射線科においてコーチングによってチーム医療と言える活動が行われるようになったがそれによって見えてくる課題も今後考えていかなければならない。

## PC-443

### 放射線科部接遇アンケート調査の実施について

北見赤十字病院 放射線科部

○相澤 幹也、古川 望

【はじめに】当院の放射線科部では、部門内にCS委員会を設置し接遇面での改善をおこなってきた。その中の活動で、今回2回目となる放射線職員の接遇に関するアンケート調査を行ったので結果報告と考察をおこなった。

【方法】アンケート期間は2014年3月24日～28日の5日間で、ポータブル撮影、血管造影を除く全てのモダリティーで実施した。質問は接遇に関する7項目とし、評価基準は大変満足から不満まで5段階評価でおこなった。評価対象職員は、受付事務員、診療放射線技師、外来放射線科看護師とした。検査終了後に放射線技師がアンケートの説明をおこない、直接用紙を渡して待合のテーブルで記入して頂き、ボックスへ投函する方式で実施した。

【結果】挨拶、言葉遣い、身だしなみ、態度、説明については、3職種共に大変満足と満足が約8割であり、基本的な接遇は概ね出来ていると思われる。待ち時間に関しては大変満足と満足を合わせた割合は6割弱であり、CTなど待ち時間の長い検査においては対策が必要と思われた。総合的な満足度は大変満足と満足を合わせると約7割であった。自由記入欄には51件の意見を頂き、そのほとんどは感謝の言葉であったが、対応に関する5件の指摘、苦情があった。内容は「待ち時間が長すぎる」「スタッフの笑声が聞こえた」「BGMの曲がうるさい」「どこの治療を行っているのか説明がない」「言葉遣いが私的に感じる」などの意見があり、これらの意見を部内で共有し改善に繋げていきたい。

【考察】放射線科部では接遇の改善のために、部内接遇勉強会の開催や、院内接遇研修、院外接遇研修会への参加などにより、接遇に関する意識が徐々にではあるが改善していると考えられるが、継続した活動が重要であると思われる。

## PC-444

### 血液センターのγ線血液照射装置の安全規制に基づく撤去・搬出状況

日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター 製剤一課

○菊地 豪、秋元 正浩、長橋 久方、松井 健太、  
鳴原 美穂、淀川 貴子、井口 朋治、若竹 大、  
秋山 綾子、千原 信夫、北村 富貴夫、百瀬 俊也、  
小泉 善男、中島 一格

【はじめに】関東甲信越ブロック血液センターでは、セシウム137を線源とするγ線血液照射装置IBL437C（フランスCIS Bio International社製、以下、γ線装置）を4台保有し、平成24年まで使用していたが、現在はX線血液照射装置を使用していることから、γ線装置を処分することとした。今回、関係法令に則りγ線装置を安全に撤去・搬出したので、その状況を報告する。

【γ線装置】I型（密封線源<sup>137</sup>Cs 62.9TBq 1本）1台、III型（同3本3台の計4台。重量は約2t/台）。

【事前手続き】放射性物質の輸送等には、放射線障害防止法施行規則等に基づき厳格な安全基準が定められている。本社がS社と業務委託契約を締結し、撤去・輸送方法については、S社・当センター間で調整の上、当センター放射線安全委員会で検討し進めた。S社は、BU線源輸送容器をフランスから輸入し、輸送業者H社と共に輸送について国交省、公安委員会及び原子力安全技術センターに申請し必要な届出を行った。

【撤去・搬出】平成26年5月7日に装置を解体し、8日22時より撤去、施設内の搬出経路の荷重に留意しつつ非常扉から1台ずつ大型クレーン車で屋外に搬出し、トラック2台に積載した線源輸送容器にγ線装置を各々収容した（9日4時完了）。5月9日、輸送物及び輸送方法が基準に適合していることを原子力安全技術センター及び国交省係官による確認を受け、S社・H社は放射性輸送物運搬確認証を受領し、成田国際空港に輸送した。その後、航空輸送で製造元へ返却した。撤去前後の照射室内の線量測定を行い異常がないことを確認した。

平成26年5月9日付けで、本社長名で原子力規制委員会へ放射性同位元素の許可使用廃止届を提出した。

## PC-445

### 急変時対応能力向上にむけての取り組み～救急看護認定看護師との協働～

名古屋第二赤十字病院 リハビリテーション科<sup>1)</sup>、看護部<sup>2)</sup>

○山口 順子<sup>1)</sup>、奥田 晃子<sup>2)</sup>、角 由美子<sup>2)</sup>、服部 泰子<sup>2)</sup>、  
足立 亜維子<sup>1)</sup>、小坂 香織<sup>1)</sup>、黒田 真梨<sup>1)</sup>、曾野 友輔<sup>1)</sup>、  
寺島 有希子<sup>1)</sup>、端谷 僚<sup>1)</sup>、山川 ひとみ<sup>1)</sup>、細江 浩典<sup>1)</sup>

【背景】当院では救急医療に対応した急性期リハビリテーション（以下、リハビリ）を中心に行っている。病態に応じてリスク管理をしながらリハビリを行う必要がある。急変を予防し、前兆をつかみ急変時には迅速に対応する必要がある。しかし現状では各個人の能力や年長者に依存しがちである。経験年数に関わらずリスク管理能力が求められるが、現状、能力向上のための定期的な勉強会等はなく、時に混乱する場面も認めている。そこで、新たな取り組みとして当院の救急看護認定看護師に講師を依頼し、急変時対応の講義・シミュレーション等の全3回の勉強会を開催した。

【目的】救急看護認定看護師とのリスク管理勉強会に対する感想、継続の必要性、その内容について、意見を集約すること。

【方法】勉強会開催時に当院リハビリ課スタッフ22名にアンケート調査を行った。質問項目および開頭法は「卒後年数」「勉強会の参加回数」「勉強会の有用さ」「難易度」「今後継続した勉強会を希望するか」を選択肢式とし、「リハビリ時のリスク管理で不安に思うこと」など自由記載の回答項目を設けた。

【結果】回収率は68.2%であった。卒後年数が6年目までのスタッフが60.0%だった。1回以上勉強会に参加したものは86.7%、勉強会に参加したスタッフ92.9%が「有用だった」「大変有用だった」と回答した。「今後も継続したリスク管理の勉強会を希望するか」には86.7%が「希望する」と回答した。

【考察】勉強会参加者の多くは認定看護師との勉強会を有用と感じ、継続を希望していた。知識の向上、対応の能力向上のためにも、必要な取り組みと考えた。